青ヶ島

出展：

http://www.panoramio.com/photo/28485008

二〇一五年一〇月二七日

ヘリコプター

青ヶ島という島の名は、小学校五年生と六年生の時の担任だった小林先生から聞いており、五〇年以上の長きにわたり頭の片隅に残っていた。なぜ、先生が青ヶ島のことを話したのか記憶にないが、ジョン万次郎のことも話していたので「漂流と島」に高い関心を持っていたのかもしれない。「絶海の孤島で船は何ケ月に一度しか来ず島民は雨水を貯めて暮らしている」というのが青ヶ島について話された主旨だった。

当時に較べると、交通アクセスは格段に改善されている。船は八丈島から週四～五便出ているし、毎日ヘリコプターも飛んでいる。

羽田空港発の第ＡＮＡ一便（七時三〇分）に乗り、八丈島へ。さらに東邦航空が運航している「愛らんどシャトル」のヘリコプターに乗り換えた。ヘリに乗るのは生まれて初めてで、少々気をもんだが、九時四〇分には青ヶ島に着いた。「愛らんどシャトル」は八丈島を起点に、青ヶ島、御蔵島、三宅島、大島、利島を巡航している。

東京から伊豆七島の一番南にある八丈島まで約二九〇キロメートル、青ヶ島は八丈島からさらに六七キロメートル南に位置している。東京から約二時間で行けるようになったのだから、半世紀前とは隔世の感がある。ただ、青ヶ島港は長い突堤が一本出ているだけだから、少し海が荒れると船は欠航になる。このためヘリが重要な交通手段となっていて、青ヶ島に来る人の約八割が利用している。このように需要が高いにもかかわらずヘリの定員は九人と少なく、一ケ月前の予約開始と同時に満席になることが多い。一方でキャンセルも多いので、仮に満席であっても諦めずにこまめに連絡すれば乗ることができる。今回は一日前に予約を入れたが、幸運にもキャンセルがあった。当日の乗客は八人で、観光客は私を含めて二人。所要時間は二〇分であった。船だと三時間かかるので、四倍の料金を払ってもヘリの方が得だ。

ヘリポートは集落のある岡部地区に整備されている。着陸後すぐに八丈島に折り返すので、乗客や送迎の人が二〇人ほど外で待っていた。なかには島の駐在所の警察官もいる。離島ではどこでは来島者を警察官がチェックしているので、おなじみの光景だ。

青ヶ島は面積五・三平方キロメートルの典型的な二重式火山である。現在西ノ島が噴火を続け、その面積を拡大しつつあるが、青ヶ島も大昔に海底火山の噴火で形成された。島の南部の

火口は直径約二キロメートルのカルデラをつくり、標高三〇〇～四〇〇メートルの外輪山がめぐらされている。火口底の噴火によって内輪山が形成され、その内側にさらに火口跡が拡がる。この山は丸山（標高二二三メートル）と呼ばれ、丸山の北側は今でも山の斜面の噴気孔から熱い水蒸気を噴出している。島の周囲九・四キロメートルは海食によって断崖絶壁が連なり、人を寄せ付けない。

青ヶ島のヘリポート

この日泊まることになっている「御宿・実朝」の関係者はヘリポートに来ていなかった。近くの青年に宿への道を聞き、歩いて五分ほどで宿に着いた。民宿は人が住まなくなった民家を買い取り最近始めたようだ。オーナーの女性は以前村役場に勤めていたが、現在は島の郵便局で配達の仕事をしている。通常は雇いの女性に食事づくりや管理をまかせているようで、宿にはこの女性がいた。宿帳に記入して、早速外に出た。

岡部地区

青ヶ島は北部の「岡部地区」と南部の「池之沢地区」に大別され、人が住むのは岡部地区で、噴火口にあたる池之沢地区は原生林と農地となっている。

岡部地区の集落は島の北側斜面に形成されている。集落の中心に、村役場、青ヶ島小中学校、診療所、図書館、保育園、駐在所などの公共施設がまとまっている。島内の幹線道路は都道で、小中学校から下った都道との交差点に島で唯一の信号がある。集落の上段には東京電力の内燃力発電所、簡易水道施設が置かれている。ちなみに青ヶ島の全家庭に電気が灯ったのが一九六六（昭和四一）年、簡易水道が給水を開始したのは一九七

九（昭和五四）年のことであった。

最初に青ヶ島村役場に向かった。役場の職員は発電所（現在は東京電力から役場が運転を受託）と診療所、保育園を除くと一七名で、このうち一〇人は島外から来た人である。役場で現在の人口、世帯数を聞き、地図と「青ヶ島島史」を購入する。

岡部地区の集落

二〇一五（平成二七）年一〇月一日現在の人口は一七〇人（男：九七人、女：七三人）、世帯数は一一一戸で、日本で最も人口の少ない村である。うち高齢者は二四人で、高齢化率は一四・一パーセントと低い。子供は、保育園児五人、小学生九人、中学生六人である。島の人口の半分ほどは島外の人である。島外者は小中学校の先生二一人、役場職員一〇人ほど、郵便局の五～六人、建設業者の雇用者一〇人ほど、医師、看護師等々、そしてその家族が含まれる。

役場の隣が「おじゃれセンター」だ。「じ」を「し」と早とちりして「おしゃれセンター」とは何だろうと中に入ると、職員が「おじゃれ」とは島言葉で「ようこそ」という意味だと教えてくれた。医師一人、看護師一人が配属されている。入口に血圧計があったので測定したところ、最高血圧が一〇一とやけに低い。機械がおかしいのではといったら、埼玉県からきたという看護師が親切にもポンプ式の血圧計で測ってくれて、機械は間違いなかった。

図書館で島関係の資料を捜そうと思ったが、あいにく開館は14時からだという。午後に回し、集落内を歩いた。集落は平地がなく坂ばかりである。大きな木は見当たらず、やたらに竹が目立つ。在来の家は石を積み上げた塀で囲まれた平屋建てで、

防風対策が徹底している。島外者は主として公営住宅に住んでいるが、何れもＲＣ構造の２階建である。

青ヶ島村役場の建物

還住の碑

村役場の上にある児童公園の脇に「還住（かんじゅう）の碑」が建っている。天明の大噴火で八丈島に避難した島民を半世紀ぶりに青ヶ島に戻した名主・佐々木次郎太夫をモデルにした記念碑だ。いわば青ヶ島の復興記念碑といえるものである。

青ヶ島にいつから人が住み始めたかは定かでないが、青ヶ島の名前が文献にでてくるのは一四七四（文明六）年のことらしい。天明の大噴火が起こる前までの青ヶ島の食糧生産条件は八丈島などに較べると格段に恵まれていたようである。噴火口のある池之沢には大池、小池という淡水の池があって水事情がよく、周囲を外輪山で囲まれていたことから台風などの風害を受けることがなかったからだ。このため、池之沢では米や麦など栽培して自給し、養蚕も行われていた。ちなみにサツマイモは当時八丈島にも、青ヶ島にもなかった。また、大きな漁船を持てる環境にはなかったが、島の周囲には黒潮がもたらすカツオやトビウオなどの水産資源も豊富であり、鰹節やトビウオの塩漬けなどがつくられていたらしい。

この青ヶ島を突然襲ったのが一七八〇（安永九）年から始まる内輪山の噴火である。その後、何年も噴火を繰り返し、一七八五（天明五）年三月に大爆発が起きた。昼でも真っ暗な日が八日間も続き、とうとう青ヶ島の島民は全員八丈島に避難することになった。四月二七日に八丈島から三隻の救助船が到着、一六三人が八丈島に逃れたが、残った約二二〇人は惨死した。

その後、何回か島民が戻ったが、基本的に無人島となってしまった。これを「天明の別れ」と呼んでいる。

一八一七（文化一四）年に佐々木次郎太夫が三九郎の跡を継いで名主となると、綿密な計画のもとで一八二四（文政七）年四月にほとんどの島民が帰島を果たす。「天明の別れ」から四〇年が経とうとしていた。その後、荒れた土地を開墾し、船着場、道路、水源地を整備、無人島時代に増えたネズミを駆除し、一八三五（天保六）年に青ヶ島の復興がほぼ終わった。今から一七〇年前のことである。この復興事業のことを、民俗学者の柳田國男は「青ヶ島還住記」として著した。「還住の碑」はこの柳田の著書からとったものだ。

児童公園の脇に建つ還住の碑

この功績により次郎太夫は幕府から一八四四（天保一五）年に一代限りの名字を許され、白銀一〇枚を賜っている。そして一八五二（嘉永五）年四月に当地で没した。集落の高台に次郎夫の墓が建っていた。この墓は東京都の指定史跡に指定されている。

信号の近くに「佐々木卯之助翁之碑」が置かれている。同じ佐々木姓だが上述の次郎太夫とは血縁関係はない。青ヶ島は八丈島と同じく流刑地であったが、佐々木卯之助はさらに遠隔地の青ヶ島に流され、島で没した有名人である。天保の大飢饉の際、鉄砲の演習場の直轄地を独断専行で農民に貸し、開墾を黙認させた罪で一八三七（天保八）年に青ヶ島に流され、一八七六（明治九）年に死去した。島に来たのは青ヶ島の復興がほぼ終わった直後のことであった。

名主屋敷跡と牛飼い

佐々木次郎太夫の墓から狭い急坂を下ると休戸橋がある。小さな谷に架かる橋で、ふだん水は流れていない。再び坂を登り、左手の名主屋敷跡の看板をすぎると、右手に清受寺という粗末な寺があった。島で唯一の寺で、入口に小さな鐘楼が吊るされていた。この先に都道と分かれる山道があり、そこを登った先が大里神社である。

木の鳥居をくぐると、玉石でつくられた急勾配の階段が海から一直線に空に向かって伸びている。団塊の世代と思われる女性が一人で階段の草むしりをしていた。昔からの島民が少なくなり、神社の手入れをする人がいないため、八丈島から毎年草むしりに来ているとのこと。今年は六月以来二回目だという。階段の玉石は島に戻った島民が海岸から拾って運びあげたものだ。二〇〇メートルほどの落差の海岸まで降り、人力で運びあげた昔の人々の苦労がしのばれる。階段の両側は竹が繁茂している。神社はコンクリート製、屋根はトタン板、扉はアルミサッシである。内部に囲炉裏と太鼓、赤鬼とおたふくのような白い女のお面が置かれていた。彼女によれば、お面は地元で「デイラホン」と呼び、祭りの時に使われるのだという。

神社改修に伴う寄付者名簿が板に書かれていた。全部で五〇人ほどの名前が連なっている。つまり神社の氏子は五〇人ほどなのだろう。ちなみに大里神社は出雲大社から分祀しているという。また、島内で死者がでると、四九日間は神社に入らない風習がある。

彼女は、フリーで時間と金があるようで、島根県の隠岐や鹿児島県の甑島のことを聞いてきた。何れ旅をしたい島のようだ。彼女によると、青ヶ島の家筋は、佐々木、広江、奥山、菊池の四氏で、このうち菊地は現在の熊本県菊池市から逃げてきた豪族の子孫で七人が八丈島に辿りついたという。また、佐々木卯之助の碑は神奈川県の茅ケ崎駅前にも置かれていることなどを教えてくれた。

神社からUターンし、名主屋敷跡に行く。島の再興を果たした佐々木次郎太夫の屋敷跡である。都道から脇道の坂を下るとみごとな玉石の石垣が現れた。八丈島にも同様の玉石の石垣がつくられているので、技術は八丈島から伝わったものだろう。一つの石を六つの石で支持している頑丈な石垣で一〇〇年以上の風雪に耐えている。この奥に屋敷があったと思われるが、草が繁り沓石などは確認できなかった。

隣の家は島一番の牛飼い・佐々木さんの家である。次郎太夫の縁者かどうか定かではない。牛飼いは島の重要な産業であった。一九七〇年以前は使役用の牛とバター作りのために乳牛が

飼われていたが、一九七〇年代から黒毛和牛の繁殖が盛んになる。多い時には島内に一〇〇頭以上の雌牛が飼われていた。しかし一九九〇年代に入ると、牛飼いはばたばたと減少し、今では一〇戸ほどになってしまった。佐々木さんは一二頭の雌牛を飼う。役場が斡旋した精子を購入、人工授精で子牛を生産している。他の人は一～二頭を飼養し、堆肥の確保が目的だという。

名主屋敷跡の入口にある玉石の石垣

島には「もんじ」と「おじゃれ杉の沢」という二軒の飲み屋があるが、昼食を食べさせる食堂はない。したがって島に五軒ある民宿は一泊三食付きである。いったん「御宿・実朝」に昼食を食べに戻る。部屋にはたれに漬け込んで焼いた魚、鶏肉と玉ねぎの卵とじ、要は親子丼の中身、アシタバのおしたしが置

佐々木さんの牛舎

かれていた。ご飯とみそ汁を勝手によそって食べる。ドリップ用のコーヒーも置いてあったので食後に飲む。明日は船が欠航するかもしれないので東邦航空にヘリのキャンセル待ちを入れておくように、との置手紙。すでにこのことを想定し、翌々日の朝便のキャンセル待ちを入れておいた。

池之沢地区

午後から噴火口の池之沢地区に降りる計画である。歩いて行けないこともないが、相当時間がかかりそうだ。サウナに入り、内輪山の丸山を歩く時間を確保するにはレンタカーで機動的に動くことが望ましい。

島で唯一の自動車修理工場がレンタカーもやっているので軽自動車を明日まで借りることにした。ちなみにこの修理工場はガソリンスタンド、酒屋も経営していて、多様な業態である。人口一七〇人の需要が少ない島では、なにごとも兼業しないと食べていけないのだろう。

東側の外輪山を進み、大千代港に行く道と分岐して坂道を下ると「平成流し坂トンネル」である。一九九二（平成四）年に開通した。これをくぐり、急坂を降りた先が池之沢である。火口に降りると環境は一変する。集落のある岡部地区や外輪山の海側は海から吹きつける強い風のため木が極端に少なく竹が一面茂っている。これに対し池之沢は風が弱く穏やかで、スダジイとタブを中心とした照葉樹林を形成している。

火口の真ん中にぽっこりと小さな山が見える。内輪山である。この内輪山の周りを取り巻くように周回道路が整備されている。火口部は手つかずの原生林に混ざって農地が拓かれている。ま

火口部と内輪山の丸山

た、自動車修理工場やセメント工場などもある。

周回道路を低速で走っていると外輪山を観察しながら歩く二人連れの地質屋さんに会った。青ヶ島は崖崩れが頻発しているため、八丈支所の依頼で崩壊状況を調べているとのことだ。

周回道路を一周し、青宝トンネルと通って青ヶ島港（三宝港）を見学、再び周回道路に戻り、原生林を通って塩工場のある駐車場から丸山に登った。山道でばったり先の地質屋さんに再会した。

西ヶ峰、大凸部、東台所尾根が連なる外輪山

丸山を歩いて一周する。およそ三〇分を要したが、尾根筋を歩くので起伏はそれほど激しくはない。内輪山の火口はすでに火山活動を停止しているので樹木で覆われている。ただ、西側の側面からはそこかしこから水蒸気が吹きあげ、岩肌がむき出しになっていて植物は見られない。

切葉の産地

風が弱く、温暖で、しかも水が周りから流入するため、池之沢地区では農業が営まれている。農業用水も整備され、最近貯水量六〇〇トンの灌漑用水タンクも新たに整備された。青ヶ島の農業の現状を見ておこう。

二〇一〇年の世界農林業センサスによると、青ヶ島の農家数は一三戸で、うち販売農家は七戸である。販売農家の農業従事者は一二人、うち五〇歳未満は五人であった。畑地の面積は六ヘクタールで、サツマイモを中心とする農作物とフェニックス・ロベレニー（通称ロベ）とキキョウラン、ハランなどの切葉類を主に生産している。切葉は水に浸しておけば萎れないことから、流通条件の悪い青ヶ島に適した栽培種なのである。最近の

農業生産額はサツマイモなどの農作物が約二〇〇〇万円、切葉が約八〇〇万円、子牛生産が五〇〇万円のあわせて三三〇〇万円ほどである。後述するようにサツマイモと麦は焼酎に加工されて島外に販売されている。

ロベの市場はそのほとんどを八丈島産が占めていて、八丈島の最近の出荷額は約一〇億円と農産物全体の半分以上に及び、八丈島の農業はこのロベに大きく依存している。青ヶ島のロベはこの八丈島から移入されたもので、最近栽培面積が拡大しているという。

サツマイモの畑

ロベは和名を親王椰子といい、もともと八丈島にはなかった植物である。一九二〇（大正九）年にロベを積んで小笠原に向かう船が時化のために八丈島に寄港した時に雌雄二株が八丈島の樫立地区に仮植され、この二株から増えた種子が八丈島のロベのツーツである。戦後間もなく観葉植物として注目され、そ

フェニックス・ロベレニーの栽培地

の後切葉として出荷され現在に至っている。他産地では葉が大きくなるのに対し、八丈島と青ヶ島のロベは花屋が使いやすい小さな葉が特徴で、競合産地が少ない。単価は一枚二〇～三〇円で変動も少なく、経営的に安定している。いったん苗を植えれば葉を収穫するだけなので、あまり手間がかからない。このため、若い人を中心に、年間を通じて世話をしなければならない牛飼いから切葉づくりに転換しているという。

ロベは風による品質低下を防ぐためネットハウスで栽培されるようになっている。火口部はもともと風が少なく適地であるが、さらにブルーのネットを張った中で栽培されていた。新たにブルーのネットをつくっている農地も見かけた。

原生林に囲まれたサツマイモ畑は風の影響を受けないが、さらに畑の周囲にサトウキビに似た植物が植えられている。防風か、防疫か、何を目的にしているのかわからない。

ひんぎゃ

内輪山の西側は土がむき出しになっていて植物が生えていない。今でも地中から火山の主蒸気が噴き出しているためだ。島で火山の噴気孔のことを「ひんぎゃ」という。この水蒸気を利用して、「ひんぎゃの塩」がつくられ、「ふれあいサウナ」が整備されている。

塩は青ヶ島港から汲んできた海水をタンクに蓄えておき、海水をろ過して平釜に入れ、噴気孔からの水蒸気を利用して煮詰める。二週間ほどで塩の結晶ができ始める。更に一週間ほどに詰めてから釜揚げし、遠心分離機で脱水して「塩」と「にがり」に分ける。さらに塩の結晶は二日間乾燥させ、塊を粉砕して「ひんぎゃの塩」ができあがる。この製塩の最大の特徴は地熱資源の有効利用を図り、海水を煮詰めるエネルギーがタダであるということだ。塩づくりは村役場が二〇〇三（平成一五）年一〇月から始めたものだが、二〇一一（平成二三）年度からは㈱青ヶ島製塩事業所に民営化されている。最近の販売実績は四トン、一〇〇〇万円強で推移している。

噴気孔のもう一つの熱利用は、一九九二（平成四）年に整備された天然サウナだ。水曜日が定休日で、一六時からオープンする。丸山から降り、サウナに行くと既に先客があり、定刻前であったが、入れてくれた。入場料は三〇〇円。サウナで敷く黄色のタオルをくれる。後で利用客を調べたところ年間二〇〇〇人前後しかない。このうち島内客と島外客の割合は一対一の比率である。これでは、おそらく管理人の人件費程度しかまかなえないだろう。

床は地熱で熱く、床下暖房が利いている。サウナ室には噴気孔から噴き出る水蒸気が導入されている。水風呂もあるのだが、コンクリートの浴槽を通じて地熱が伝わり、湯になってしまうため使われていない。

サウナには神奈川県から来たとおぼしき同年輩の二人が先に入っていた。続いて例の落石の調査に来た地質屋さんの二人も加わった。タオルを持参していなかったので体を洗うのはやめ、ただしシャンプーが置いてあったので頭は洗う。たっぷり汗をかいて休憩室でひと休みしてから外に出た。外には蒸気を利用した地熱釜がある。水蒸気で、野菜や芋、卵をもってきて調理する人も多いという。

青ヶ島ふれあいサウナの入口

閉館時間が迫っていたので急いで村役場に引き返し、図書館に行く。着いたのはちょうど閉館時間の一七時一五分であった。ここの職員も島外の出身である。娘夫婦が離島の郵便局勤務を志願してきたので、一緒についてきたという。娘夫婦は神津島に転勤になったが、青ヶ島が気に入り一人で残ったのだそうだ。資料にざっと目を通し、必要箇所を写真撮影した。少し時間を延長してくれた。

焼酎工場

青ヶ島の基幹産業は公共事業に依存する建設業。これに次ぐのが「青酎」の名で知られる焼酎である。二〇一三（平成二五）年の焼酎の販売実績は四八・二キロリットル、八一四二万円であった。

焼酎工場は宿から歩いて数分のところにある。宿のオーナーのお兄さんが一八時に工場を案内してくれることになっていた。

約束の時間よりも三〇分ほど早く着いたが、工場にはだれもいない。既に陽が落ちていて事務所に電気がついているだけだった。事務所の椅子に座って当たりをながめまわしていたが、そのうち奥山さんが戻ってきた。何でも昼間は建設業の仕事をしているようで、仕事を終えてから焼酎工場にくるようだ。

この工場は焼酎をつくる島民の共同工場である。二〇〇八（平成二〇）年三月に稼働した。島の生産者（杜氏）はこの工場を借りて焼酎を生産している。早速、中を案内してもらった。

原料を蒸す釜、発酵槽、発酵タンク、蒸留装置などをひと通り見る。青ヶ島の焼酎生産者は一〇人で、一三種類の焼酎を生産している。原料はサツマイモと麦、両方をブレンドしているものもある。原料は島内産と島外からの移入品に分けられ、量的には移入品の方が多いと推定される。鹿児島の芋焼酎や沖縄の泡盛、奄美諸島の黒糖酒は何れも米麹を使用しているのに対し、青酎の特徴は麦麹を用いることである。麹は白麹、黒麹と天然の三種類が用いられており、白麹は発酵力が強く量産向き、黒麹は甘みがあり、天然麹は味が複雑で酸味が強い、という特徴があるのだそうだ。また、仕込みは丼仕込みという麹と麦を同時に投入してもろみをとる方法と、麹だけでつくった一次もろみに芋を投入して二次もろみをとる二段仕込みに分かれる。麦を蒸して麹を入れると二四時間で発酵する。熱くなると麹菌の力が弱くなるのでタンクの周りに水を回して冷やす。もろみができるまで、白麹と黒麹は二週間ほど、自然麹だと約一ヶ月かかるのだそうだ。これを蒸留器で蒸留して焼酎を得る。最初に出て来る蒸留分はアルコール分が七〇度もあるという。

サツマイモの栽培と焼酎の製造技術は八丈島から伝わったも

青酎の仕込みタンク

のであった。サツマイモが八丈島に伝わり、本格的に栽培されるようになったのは一八一一（文化八）年ごろからである。したがって、青ヶ島での栽培はさらに遅れていたと思われ、「天明の別れ」から島民が島に戻り復興がなった一八三五年以降のことである。一方、焼酎の製造技術を八丈島に伝えたのは薩摩藩の流人・丹宗庄右衛門（たんそうしょうえもん）であった。庄右衛門は一八五三（嘉永六）年に密貿易の罪で八丈島に流されてきた。当時の八丈島は頻繁に飢饉が起こり、食糧難が続いていたため、米から酒をつくると庶民の食糧不足がさらに深刻になるため一八二八（文政一一）年に神事や祝儀の場合を除いて酒造を禁止していたのである。芋を原料にすれば穀物を使わなくていい。彼は郷里の薩摩から焼酎の製造器具をとりよせ、芋焼酎製造の技術を伝えた。これが現在の八丈焼酎のルーツであり、青ヶ島にはおそらく一九世紀末に伝わったものと推定される。

青ヶ島では島でとれたサツマイモと麦を原料に各家で焼酎をつくり、自家用に飲まれていたのである。交通の極めて不便な青ヶ島には国税庁の役人も来ないことから、いわば密造酒として島民に飲まれ続けてきた。

一九八四（昭和五九）年に島の生産者が出資して青ヶ島酒造合資会社を設立、島おこしにむけてこの密造酒は晴れて公に販売することになったのである。生産量が少なく、しかも手造りに近いため、この青酎は「幻の焼酎」として俄然注目を集めるようになり、近年人気が高くなっている。しかし、生産量が限定されているため、どこでも買えるものではない。販売先は「東京愛らんどアンテナショップ」、世田谷の等々木にある「池田屋」などに限られている。

お土産に「青酎・伝承」を購入した。七〇〇ミリリットルで

青酎の各種銘柄

税抜き三〇〇〇円なので、けっこういい値段である。ただ、年間の生産本数は一〇〇〇本というからかなりの限定品といえる。この銘柄は島内産の麦とサツマイモが原料で、麹は天然麹を使用した丼仕込みである。つまり昔から青ヶ島でつくってきた典型的な「島酒」なのである。島でつくっているサツマイモの品種は何種類もあるらしい。奥山さんの話では、リスクヘッジのため異なる品種のサツマイモをつくっているとのことだ。そして気温が温暖なため、関東地方では一〇月一杯くらいまでに収穫するのに対し、青ヶ島は温暖で霜がないため、一二～一月ごろまで置いておけるという。これから焼酎の生産が本格化する。

島ではサツマイモを収穫した後に麦を植え、麦の後にサツマイモを植えるという輪作体系が成り立っている。そして、サツマイモは生で島外に出荷するのではなく、焼酎にして販売しているので、島としては典型的な六次産業化が実現しているわけだ。

奥山さんは全ての焼酎を試飲させながら、銘柄の特徴を解説してくれた。また、炭酸割り、水割りの二通りの飲み方も披露してくれた。けっこう飲んでしまった。車で帰るのが心配だったが、道を歩いている人はいないし、距離もたいしたことはないので、飲酒運転とあいなった。

焼酎工場から宿に戻った。サウナに入ったので宿では風呂に入らず、すぐに夕食になった。ところがビールは置いていない。酒類は全て持ち込みだというので、十一屋酒店まで買いに行く。ちなみに十一屋酒店では「青酎池の沢」のブランドで、麦と芋のブレンド酒をつくっている。雑味がなく飲みやすいというが、工場でたくさん試飲してきたので焼酎はやめた。

宿には私の他に、土建業の現場で働く若い女性がいた。島外からやってきたいわゆる「ドボジョ」だ。彼女はこの宿に下宿しているようで、食事は部屋で食べていた。島の最大の産業は土建業である。島には青ヶ島総合開発、広江建設の二社があり、さらに五洋建設の作業場もある。青ヶ島港は長期にわたり建設中のためだ。島民のほとんどは土建業に従事しているが、それでも人手が足りないので島外の労働力が必要なのだろう。労働力は東北の震災復興にとられているから、「ドボジョ」も島にとっては貴重な戦力となっている。

宿のオーナーは食事の後半に現れた。飯を食べながら、島の事情を聞いた。オーナーは奥山さんといい、一九六九（昭和四四）年に青ヶ島で生まれた。島に二軒ある居酒屋はけっこう賑わっていて、地元情報を得るには好都合なので、様子をみに行こうかと思ったが、両店とも経営者は島外の人だと聞いてやめ

た。

二〇一五年一〇月二八日
外輪山と簡易水道

日の出とともに外出する。車で大凸部（おおとんぶ）の麓まで行き、歩いて登る。大凸部は外輪山の最高点で、標高四三二メートルである。ここから内輪山と火口を一望できるはずだが、すっぽりと朝モヤがかかり、全く見えない。昨夜の雨でカタツムリがでてきたのだろう、山道でたくさん見かけた。そのうち二個体を採集して持ち帰った。朝露でズボンも靴も濡れてしまった。早々に引き返して車に戻った。

集落から青ヶ島港までは外輪山の尾根伝いの道が通っていた。その道に向かったが、集落のはずれにある広江建設の先で通行止めとなった。この先は崖崩れで行けない。

続いて、東電の発電所前を通り、簡易水道施設にいく山道を走る。施設の脇に車を止めて尾山展望公園まで歩き、つづいて東台所（とうだいしょ）神社まで行く。大凸部の登り口からも玉石の階段ができていて、神社付近で合流する。しかし、このルートは滑りやすいため、一般には尾山展望公園経由が勧められている。

青ヶ島では山に降った雨を集めて簡易水道の水源としているが、その集水斜面が緑色に塗られている。通常は谷に集まった水を利用するが、こうして山の斜面に不透水の処理をして集めているケースは全国でも例を見ないだろう。かなり特異な景観を形成している。

七時ごろ、拡声器で本日の船は出港するとのアナウンスあった。民宿に戻って朝食、誰もいないので勝手に食べる。「ドボジョ」のお姉さんも出勤していった。

緑色に塗られた簡易水道水の集水面

「御宿・実朝」の坂を下ると五洋建設の工事事務所、されにその先に島のゴミ処理を行うクリーンセンター、海に近くなると一面竹林が続く。かつて牛の放牧場であったジュウマン共同牧場、今は牛の飼育頭数が減っているため、竹が覆われている。

続いて、レンタカー会社の道を下った先にある神子の浦展望公園に行く。かつてこの下は島の唯一の玄関口であった。三〇〇メートルほどの絶壁を下った先に船がついた。もちろん大きな船は着岸できないので、艀（はしけ）で往復したが、現在はやはり崖崩れで下に行くことはできない。

ヘリポートには、九時四五分発のヘリに乗る人が待っていた。ここで地質屋さんに四たび再会。ヘリポートの先に金比羅神社がある。間違えて隣の家へいってしまい、東台所神社のお参りからちょうど戻ったこの家の奥さんと立ち話をした。奥山さんといい七八歳になる。御主人は金比羅神社の神主をしている。島の出身だが、ご主人が肺結核を患い東京で療養していたため二〇年ほど島外で生活したという。この家は屋根の高さまで石垣の塀で囲まれていて、青ヶ島の民家の典型的な造りだ。家の脇には牛小屋があり1頭の牛が飼育されていた。牛舎の前にはサツマイモ畑がひろがり、焼酎をつくっている家に売るのだそうだ。

石垣で囲まれた島の典型的な家

崖崩れ

外洋にある島は波浪により周囲から削り取られていく宿命を負っている。青ヶ島もできた当初はなだらかな裾野が形成されていたに違いないが、海食によって削り取られ、断崖絶壁になった。そして更に削り取られ、がけ崩れが起こりやすくなって

いる。神社で会った女性も、宿のオーナーも、青ヶ島は「近年、崖崩れがひどくなっている」と言っていた。

港が一つだけでは風向きによって船が着岸できないため、青ヶ島港の反対側（東側）に一九七八（昭和五三）年から大千代港の整備が進められた。しかし、一九九四（平成六）年に港の上で大きな崩落事故が発生し工事が中断、さらに一九九六年には大規模な崩壊が起こり全く使用できなくなった。

この大千代港にアクセスするためにつくられた外輪山の尾根道を車で進んだ。行き止まりまで行くと車がUターンできない恐れがあるため、車を止めて途中から徒歩に切り替え大千代港への道を下った。やがて道は通行止めになり、目の前に崩落した斜面が現れた。村道の脇には犠牲者を悼む石碑が建っていた。「平成六年九月二七日、村道崩壊により没した三名の霊に捧ぐ」と書かれた石碑に久保田浩、荒井武雄、瀬尾輝夫の三名の氏名が刻まれていた。おそらく全員が島外の人だろう。

役場に再び顔を出し、広報誌を見せてもらうことにした。しかし役場には在庫はなく、図書館にあるという。図書館の鍵を開けてもらい、サウナの利用者および出入島者数のデータを書き写す。また、青ヶ島に関する文献もカメラで撮った。その中に平成六年版の「青ヶ島村の概要」という小冊子があった。おそらくこの類いの資料は毎年更新しているに違いないと思い、役場の職員にたずねると皆押し黙っている。そのうち女性職員が「平成二六年版」があると答えた。ところがすぐに出てこない。どうやらパソコンから出力しようとしているようなのだが、何をしているのかさっぱりわからない。しばらくして作業をしていた女性がデータを私の前に放り投げた。職員は我関せず

大千代港に通ずる道路の崩落現場

パソコンに向かっている。全く覇気がない。わざわざ島に来て働くくらいなので、やる気のある人が多いのかと想像していたが、ま逆であった。むしろ島外の落ちこぼれが島に集まった感じで、残念至極である。

レンタカー会社と宿で清算し、池之沢地区に向かう。地図に「ガケ崩れの危険あり」と書かれた道を進むと、外輪山の崖下にコンクリート製の避難用シェルターが現れた。その奥は防災科学技術研究所の青ヶ島地震観測施設だった。道はすぐに行き止まりとなり、その手前に有刺鉄線に囲まれ、黄色に塗られた鉄製の弾薬庫があった。多分崖崩れが発生した時に対処するためにダイナマイトが保管されているものと思われる。近辺の原生林には南方系のシダの一種・オオタニワタリが群生していた。

青ヶ島の玄関口である青ヶ島港に通ずる外輪山の尾根ルートもすでに崩壊している。外輪山のどてっ腹に穴をあけた青宝トンネルが港への唯一のルートである。一九八五年に一年半かけて完成した。港の背後は崖崩れを防止するためほぼ前面にコンクリートが吹きつけられ、さながら要塞のおもむきである。新設された船客待合所は上から岩が落ちてきても大丈夫なように頑丈なコンクリートでできている。さらに落石対応のシェルターを隣に建設中で、二〇人ほどの作業員が作業にあたっていた。

自然の脅威に対して人の力は知れている。いつこの要塞が崩れ落ちるかわからないが、永遠でないことだけは確かだ。

漁業と島寿司

昨夜の夕食はカキフライ、豚肉の生姜焼、メジナの酢漬け、里芋煮、明日葉の胡麻和え、そして島寿司であった。カキと豚

背後の崖をコンクリートで固めた三宝港

肉は島外のものだが、他は島内でとれたものでとりわけ島寿司は八丈島と青ヶ島の郷土食である。

島寿司のネタは、マグロ、カツオ、メダイなど何でもありだ。その時獲れた魚を使う。この日はほとんど市場価値のないイスズミであった。宿のオーナーが港で釣ってきた。ネタは醤油に酢を入れた液にさっとくぐらせる。いわゆる「ヅケ」というやつだが、長くは漬けない。昔は今より砂糖で甘みを強くした寿司飯だったという。つまり保存食で、数日間は食べられたそうだ。全部で一〇貫あり苦戦しそうだったが、結局平らげてしまった。このように島では昔からけっこう魚を食べている。ここで青ヶ島における漁業の概要を整理しておこう。

青ヶ島の周囲は断崖絶壁が連なるため、船を留める港がなかった。「神子の浦」の玉石の浜が唯一の船の発着場で、沖に泊まった大型船との間を艀が通っていた。したがって、船は玉石の浜から崖の途中まで人力で引き上げなければならず、大きな船を持てなかったのである。周囲を海に囲まれ、黒潮によってもたらされる水産資源が豊富だったにもかかわらず、その恩恵に浴しなかった。戦後まもなく青ヶ島を調査した酒井卯作によると、「幸い、島の周囲は漁場として適当な場所であるが、近年は内地や八丈島からくる機動力のある漁船に荒らされて、漁業も次第に衰微の一途をたどっている」ということになる。

しかし、青ヶ島港の整備が進むにつれ状況が変わってきた。青ヶ島に最初の突堤が整備されてから漁船を引き上げる斜路ができ、さらに漁船をワイヤーでくくって吊り上げるクレーンも整備され、比較的大型の動力船を持てるようになったのである。

二〇一三年漁業センサスによると、青ヶ島の漁業経営体は八、漁業就業者も八人、漁船数も八隻である。全員が一種兼業で、専業者はいない。

統計の通り青ヶ島港には八隻の漁船が陸揚げされていた。一方、島には漁業協同組合が組織され、役場に事務局が置かれている。残念ながら、事務局の職員は不在で話を聞けなかったのだが、支庁の資料では正組合員が二〇人となっている。漁船数とは合致しない。おそらく水産業協同組合法上の基準をクリアーするための数合わせととれないこともないが、宿のオーナーの話では、港や磯に降りて釣りをする人が結構いるそうだ。断崖を磯まで降りるために手づくりの梯子などが用意されていて、ナカウラ、オオネカル、クロネなどいくつかの釣りポイントがあるという。この磯では、イサキ、メジナ、アカハタ、小さいカンパチ、シマアジ、ヒラマサ、イシガキダイ、さらに深場に棲むメダイも釣れる。こうした釣りをする人も含めて組合員を

確保しているものと思われる。

島で営まれている漁船漁業は、①カツオ、マグロ類（キハダ、ビンチョウ）、カジキ類などの回遊魚を対象とする曳釣り、②アオダイ、メダイなどの深場の一本釣りで、年間の生産額は一〇〇〇万円強である。やはり宿のオーナーの話だが、八人の漁師のうち現在島を出ている人が二人、建築の仕事をしている人が四人、島でまともな漁師は一人だけだという。その人は発電所勤務と漁師の兼業だ。あいにくこの人も勤務時間中で話を聞くことができなかった。漁船を上げ下ろしするためのクレーン操作は一人でできるそうだが、ばかでかいクレーンで漁船を吊り上げる光景は驚異である。この作業は危険を伴うことから、凪の時しか操業できない。

漁船を引き上げる巨大なクレーン

陸上に引き上げられた漁船

漁獲物は連絡船に乗せて八丈島に運び、翌日の東海汽船の船に積んで夜竹芝桟橋に着く。そして翌々日の築地市場に出荷される。つまり、消費地市場に青ヶ島の魚が並ぶのは三日後になる。

港湾整備と連絡船

青ヶ島に定期船が来るようになったのは一八九四（明治二七）年のことで、五月と七月の二回、小笠原に行く船が寄り、郵便の集配が行われるようになった。戦後の一九四九（昭和二四）年に東海汽船の船が東京～父島から青ヶ島を結び、その回数も増えてきた。この当時の青ヶ島の玄関口は集落の下にある「神子の浦」であった。ここは玉石の海岸で、船は接岸できず、小さな艀が陸と沖の船をつないだ。艀は櫓で漕いだが、その後動力船になった。

現在の青ヶ島港の整備が始まるのは一九五七（昭和三二）年からである。東京都が港湾管理者となり、一九五九年から本格的な整備が開始された。島の南西部にある大三宝と小玉宝という岩礁を利用して港の建設が進められた。一九六二（昭和三七）年には艀の陸揚げ設備ができ、一九六四年にはウインチが取り付けられた。港に小さな突堤が完成し、船が接岸できるようになったのは一九六五（昭和四〇）年のことである。一九六八（昭和四三）年から東海汽船の就航回数は月一回から二ケ月に三回に増えた。

一九七二（昭和四七）年に八丈島と青ヶ島の間を村営船「あおがしま丸」が初めて就航し、両島間を二時間四〇分で結んだ。回数も初めは五日に一回の頻度であったが、その後週二回に増便された。宿のオーナーが子供のころ、連絡船は五と一〇の日

断崖絶壁に築かれた青ヶ島港

に来たといっていたが、この当時のことを指している。

一九七五（昭和五〇）年には伊豆諸島開発㈱の貨客船「弥栄丸」が月に三回就航、一九八七年には村営連絡船・「あおがしま」が来るようになる。一九八八年には伊豆諸島開発㈱の貨客船「黒潮丸」（四四〇トン）が1週間に1回になる。さらに一九九二（平成四）年に同社の還住丸（一一九トン）が就航し、一九七二年から続いていた村営船は廃止された。二〇〇〇（平成一二）年五月に現在の一七〇メートル新しい突堤が完成し、ゆり丸の接岸試験が行われ、翌年六月から供用が開始された。二〇一四（平成一六）年には環住丸に変わり現在の「あおがしま丸」（四六〇トン、定員五〇名）が就航した。つまり現在の運航体制になって、たかだか一五年しか経っていないわけだ。

現在の青ヶ島港は、最初にできた五〇メートルの短い突堤に新たにつくられた一四〇メートルの突堤の二本が外洋に突き出ているだけ、およそ「港」と呼ぶには程遠い状況で、静穏域の確保は全く不十分である。したがって、冬季を中心に海上が時化ると船は接岸できず、年間の就航日数は一六〇日前後と低い。

船の切符の販売時間は一二時一五分から三〇分までの一五分間に限られる。事務の女性がこの時間帯に集落からやってきて販売する。「昨日は乗り遅れた人がいたので、気をつけるように」とレンタカー会社に言われていたので、少し早めに港に到着した。一二時四〇分ごろ、「あおがしま丸」が入港した。風が比較的強く波高は三メートルほどあったが、無事に着岸、クレーン車でタラップが架けられ、八丈島からの五人が下船した。引き続き青ヶ島から私を含め乗客一二人が乗り込む。物資を運ぶコンテナ二箱が積み込まれ、一三時二〇分に船は島を離れた。しばらくデッキで青ヶ島が遠ざかるのを眺めていたが、船はかな

2014 年に就航した新船・あおがしま丸

り揺れ、歩行もままならないため座敷に入って横になった。

一六時過ぎに八丈島の底土港に入港。港に一番近い「シェルトーン」というペンションに宿をとった。夕食は青酎の販売先である「梁山泊」という居酒屋に食べに行くことにした。途中の本屋で「八丈島誌」を購入。「梁山泊」は八丈島の郷土料理が売りだ。当日のメニューを紹介しておこう。

八丈島名物の島すし（ハチビキ、カンパチ、シマアジ、ハバノリ）

付きだしにポテトサラダ、刺身は島で赤サバというハチビキ、カンパチ、シマアジ。青唐辛子をかじりながら食べる。クサヤはムロアジの小ぶりのもので、御主人の話ではこのサイズが出回るのは一週間ほどに限られるという。島で「にょうげいも」と呼ぶ里芋はカツオの塩辛をつけて食べる。ブドはカギイバラノリという海藻を煮て固めたもの、中に白身の魚肉が入っていた。続いてトビウオのすり身の揚げ団子、しめは島寿司四貫である。寿司ネタは刺身と同じ、これにハバノリが加わった。

【文献】

酒井卯作（一九七五）：東京都青ヶ島、離島生活の研究、日本民俗学会編、図書刊行会、153-178.